

## かちかち山

楠山正雄 さく

—

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが  
 がありました。おじいさんがいつも畑はたけに出て働はたらいています  
 と、裏うらの山から一ひびきの古ふるだぬきが出てきて、おじいさんが  
 せっかく丹精たんせいをしてこしらえた畑はたけのものを荒あらした上に、ど  
 んどん石いしころや土つちくれをおじいさんのうしろから投げつけま  
 した。おじいさんがおこって追おっかけますと、すばやく逃にげ

て行ってしまいます。

しばらくするとまたやって

来きて、あいかわらず

いたずらをしました。

おじいさんも困こまりきって、

わなをかけておきますと、

ある日、たぬきはとうとう

そのわなにかかりました。

おじいさんは躍おどり

上あがって喜よろこびました。

「ああいい気味きだ。



とうとうつかまえてやった。」

こう言って、たぬきの四つ足をしばって、うちへかっいで帰りました。そして天井のはりにぶら下げて、おばあさんに、「逃がさないように番をして、晩にわたしが帰るまでにたぬき汁をこしらえておいておくれ。」

と言いのこして、また畑へ出ていきました。

たぬきがしばらくぶら下げられている下で、おばあさんは臼を出して、とんとん麦をついていました。そのうち、

「ああくたびれた。」

とおばあさんは言って、汗をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下がっていたたぬきが、上から声をか

けました。

「もしもし、おばあさん、くたびれたら少しお手伝いをいたしましょう。その代わりこの縄をといて下さい。」

「どうしてどうして、お前なんぞに手伝ってもらえるものか。縄をといてやったら、手伝うどころか、すぐ逃げて行ってしまっただろう。」

「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今さら逃げるものですか。まあ、ためしに下ろしてごらん下さい。」

あんまりしつこく、殊勝らしくたのおもものですから、おばあさんもうかうか、たぬきの言うことをほんとうにして、縄をといて下ろしてやりました。するとたぬきは、

「やれやれ。」

としばらくされた手足をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言いながら、おばあさんのきねを取り上げて、麦をつくふりをして、いきなりおばあさんの脳天からきねを打ち下ろしますと、「きやっ。」という間もなく、おばあさんは目をまわして、倒れて死んでしまいました。

ためきはさっそくおばあさんをお料理して、ためき汁の代わりにばあ汁をこしらえて、自分はおばあさんに化けて、すました顔をして炉の前に座って、おじいさんの帰りを待ちうけていました。

夕方になって、なんにも知らないおじいさんは、

「晩はためき汁が食べられるな。」

と思つて、一人でここにこしながら、急いでうちへ帰つて来ました。するとためきのおばあさんはさも待ちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいんなさい。さっきからためき汁をこしらえて待っていましたよ。」

と言いました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

と言いながら、すぐにお膳の前に座りました。そして、ためきのおばあさんのお給仕で、

「これはおいしい、おいしい。」

と言いって、舌したつづみをうって、ばばあ汁じるのおかわりをして、夢中むちゆうになって食たべていました。それを見みてたぬきのおばあさんは、思おもわず、「ふん。」と笑わらうひょうしにたぬきの正しょうたい体を現あらわしました。

「ばばあくったじじい、流ながしの下ほねの骨みを見ろ。」

とたぬきは言いいながら、大きなしっぽを出だして、裏うらぐち口からついと逃にげていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰こしをぬかしてしまいました。そして流ながしの下ほねのおばあさんの骨ほねをかかえて、おい

おい泣ないていました。

すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

と言いって、これも裏うらの山しろにいる白しろうさぎが入はいって来きました。

「ああ、うさぎさんか。よく来きておくれだ。まあ聞きいておくれ。ひどい目めにあったよ。」

とおじいさんは言いって、これこれこういうわけだとすっかり話はなしをしました。うさぎはたいそう気きの毒どくがって、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつとって上あげますから、安あんしん心しんしていらっしゃい。」

とたのもしそうに言いいました。おじいさんはうれし涙なみだをこ

ぼしながら、  
「ああ、どうか頼みますよ。ほんとうにわたしはくやしくつてたまらない。」

と言いました。

「大丈夫。あしたはさつそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合わせてやります。しばらく待っていていらっしやい。」  
とうさぎは言って、帰っていきました。

## 二

さてたぬきはおじいさんのうちを逃げ出してから、何だかこわいものですから、どこへも出ずに穴にばかり引っ込んで

いました。

するとある日、うさぎはかまを腰にさして、わぎとたぬきのかくれている穴のそばへ行って、かまを出してしきりにしばを刈っていました。そしてしばを刈りながら、袋へ入れて持って来たかち栗を出して、ばりばり食べました。するとたぬきはその音を聞きつけて、穴の中からのそのそはい出してきました。

「うさぎさん、うさぎさん。何をうまそうに食べているのだね。」

「栗の実さ。」

「少しわたしに出来ないか。」

「上げるから、このしばを半分向こうの山までしよっていっ  
ておくれ。」

たぬきは栗がほしいものですから、しかたなしにしばを背  
負って、先に立って歩き出しました。向こうの山まで行く  
と、たぬきはふり返って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずんずん先に立って歩い  
ていきました。やがてもう一つ向こうの山まで行くと、たぬ  
きはふり返って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

「ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向こうの山まで行っ  
ておくれ。こんどはきつと上げるから。」

しかたがないので、たぬきはまた先に立って、こんどは何  
でも早く向こうの山まで行きつこうと思つて、うしろもふり  
向かずにせつせと歩いていきました。うさぎはそのひまに、  
ふところから火打ち石を出して、「かちかち。」と火をきりま  
した。たぬきはへんに思つて、

「うさぎさん、うさぎさん、かちかちというのは何だろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

と言つて、たぬきはまた歩き出しました。そのうちにうさ

ぎのつけた火が、たぬきの背中のしばにうつって、ぼうぼう燃え出しました。たぬきはまたへんに思っ

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼうというのは何だろう。」

「向こうの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが言ううちに、もう火はずんずん背中に燃えひろがってしまいました。たぬきは、

「あつい、あつい、助けてくれ。」

とさけびながら、夢中でかけ出しますと、山風がうしろからどっと吹きつけて、よけい火が大きくなりました。たぬきはひいひい泣き声を上げて、苦しがつて、ころげまわって、

やっとのことで燃えるしばをふり落として、穴の中

「やあ、たいへん。火事だ。火事だ。」

と言いながら帰っていきました。

### 三

そのあくる日、うさぎはおみその中に唐がらしをすり込んでこうやくをこしらえて、それを持ってたぬきのところへお見舞いにやって来ました。たぬきは背中大やけどをして、うんうんうなりながら、まっくらな穴の中

「たぬきさん、たぬきさん。ほんとうにきのうはひどい目にあったねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目にあったよ。この大おおやけどはど  
うしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまりき気の毒どくだから、わたしがやけど  
にいちばん利きくこうやくをこしらえて持もって来きたのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さっそくぬってもらおう。」

こういってたぬきが火ぶくれになって、赤あか肌はだにただれてい  
る背せ中なかを出だしますと、うさぎはその上に唐とうがらしみそをとこ  
ろかまわずこてこてぬりつけました。すると背せ中なかはまた火が

ついたようにあつくなくて、

「いたい、いたい。」

と言いいながら、たぬきは穴あなの中なかをころげまわっていました。  
うさぎはその様よう子すを見てにこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴりするのははじめのうちだけだ  
よ。じきになおるから、少すこしの間あいだがまんおし。」

と言いって帰かえっていきました。

#### 四

それから四、五日いちにちたちました。ある日ひうさぎは、  
「たぬきのやつどうしたろう。こんどはひとつ海うみに連つれ出だし



て、ひどい目にあわせてやろう。」  
 と独り言を言っているところへ、ひよっこりたぬきがたずねて来ました。

「おやおや、たぬきさん、もうやけどはなおったかい。」

「ああ、お陰でたいぶよくなったよ。」

「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」

「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、こんどは海へ行こうじゃないか、海はおさかながとれるよ。」

「なるほど、海はおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬきは連れだって海へ出かけました。う

さぎが木の舟をこしらえますと、たぬきはうらやましがって、まねをして土の舟をこしらえました。舟ができ上がると、うさぎは木の舟に乗りました。たぬきは土の舟に乗りました。べつべつに舟をこいで沖へ出ますと、

「いいお天気だねえ。」

「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いながら、めずらしそうに海をながめていました。うさぎは、

「ここらにはまだおさかなはいないよ。もっと沖の方までこいで行こう。さあ、どっちが早いか競争しよう。」

と言いました。たぬきは、

「よし、よし、それはおもしろかろう。」  
と言いました。

そこで一、二、三とかけ声をして、こぎ出しました。うさぎはかんかん舟ばたをたたいて、

「どうだ、木の舟は軽くなって速かろう。」

と言いました。するとたぬきも負けない気になって、舟ばたをこんこんたたいて、

「なあに、土の舟は重くなって丈夫だ。」

と言いました。

そのうちにだんだん水がしみて土の舟は崩れ出しました。

「やあ、たいへん。舟がこわれてきた。」

とたぬきがびっくりして、大さわぎをはじめました。

「ああ、沈む、沈む、助けてくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる様子をおもしろそうにながめながら、

「ぎまを見る。おばあさんをだまして殺して、おじいさんにばばあ汁を食わせたむくいだ。」

と言いますと、たぬきはもうそんなことはしないから助けってくれと言って、うさぎをおがみしました。そのうちどんどん舟は崩れて、あっぱあっぱいうまもなく、たぬきはとうとう沈んでしまいました。

---

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社  
1983（昭和58）年5月10日第1刷発行  
1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

---

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かちかち山

楠山正雄 さく

—

むかし、むかし、あるところ  
に、おじいさんとおばあさん  
がありました。おじいさん  
がいつも畑はたけに出て働はたらいていま  
すと、裏うらの山から一いびきの古ふる  
だぬきが出てきて、

おじいさんがせつつかく丹精たんせいを  
してこしらえた畑はたけのものを荒あ  
らした上に、どんどん石いしころ  
や土つちくれをおじいさんのうし  
ろから投げなつけました。おじ  
いさんがおこって追おっかけ  
ますと、すばやく逃にげて行っ  
てしまいます。しばらくする

とまたやって来て、あいかわ  
らずいたずらをしました。お  
じいさんも困こまりきって、わな  
をかけておきますと、ある日、  
たぬきはとうとうそのわなに  
かかりました。

おじいさんは躍おどり上あがって  
喜びよろこびました。

「ああいき味みだ。とうとう  
つかまえてやった。」

こう言いって、たぬきの四よつ



足をしばって、うちへかついで帰りました。そして天井のはりにぶら下げて、おばあさんに、「逃がさないように番をして、晩にわたしが帰るまでにたぬき汁をこしらえておいておくれ。」  
と言いのこして、また畑へ出ていきました。  
たぬきがしばらくぶら下

げられている下で、おばあさんは臼を出して、とんとん麦をついていました。そのうち、「ああくたびれた。」とおばあさんは言って、汗をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下がっていたたぬきが、上から声をかけました。  
「もしもし、おばあさん、くしに下ろしてごらん下さい。」  
あんまりしつこく、殊勝らしくたのおも物ですか、おばあさんもうかうか、たぬきの言うことをほんとうにして、縄をといて下ろしてやりました。するとたぬきは、「やれやれ。」  
としばられた手足をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげ  
ましよう。」

と言いながら、おばあさん  
のきねを取り上げて、麦をつ  
くふりをして、いきなりおば  
あさんの脳天からきねを打ち  
下ろしますと、「きやっ。」と  
いう間もなく、おばあさんは  
目をまわして、倒れて死んで  
しまいました。

たぬきはさっそくおばあさ

しながら、急いでうちへ帰っ  
て来ました。するとたぬきの  
おばあさんはさも待ちかねた  
というように、

「おや、おじいさん、おかい  
んなさい。さつきからたぬき  
汁をこしらえて待っていていま  
たよ。」

と言いました。

「おやおや、そうか。それは  
ありがたいな。」

んをお料理して、たぬき汁の  
代わりにばあ汁をこしらえ  
て、自分はおばあさんに化け  
て、すました顔をして炉の前  
に座って、おじいさんの帰りを  
待ちうけていました。  
夕方になって、なんにも知  
らないおじいさんは、  
「晩はたぬき汁が食べられる  
な。」  
と思つて、一人でにここにこ

と言いながら、すぐにお膳  
の前に座りました。そして、  
たぬきのおばあさんのお給仕  
で、

「これはおいしい、おいし  
い。」

と言つて、舌つづみをうっ  
て、ばあ汁のおかわりをし  
て、夢中になって食べていま  
した。それを見てたぬきのお  
ばあさんは、思わず、「ふふ

ん。」と笑うひょうしにたぬきの正体を現しました。

「ばばあくったじじい、流しの下の骨を見ろ。」

とたぬきは言いながら、大きなしっぽを出して、裏口からついと逃げていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰をぬかしてしまいました。そして流しの下のおばあさんの骨をかかえ

て、おいおい泣いていました。すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

と言って、これも裏の山にいる白うさぎが入って来ました。

「ああ、うさぎさんか。よく来てくれた。まあ聞いておくれ。ひどい目にあったよ。」とおじいさんは言って、こ

れこれこういうわけだとすっかり話をしました。うさぎはたいそう気の毒がって、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつととって上げますから、安心していらっしやい。」

とたのもしそうに言いました。おじいさんはうれし涙をこぼしながら、

「ああ、どうか頼みますよ。」

ほんとうにわたしはくやしくなってたまらない。」

と言いました。

「大丈夫。あしたはさっそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合わせてやります。しばらく待っていていらっしやい。」

とうさぎは言って、帰っていきました。

さてたぬきはおじいさんのうちを逃げ出してから、何だかこわいものですから、どこへも出ずに穴にはかり引っ込んでいました。

するとある日、うさぎはかまを腰にさして、わざとたぬきのかくれている穴のそばへ行って、かまを出してしきり

「少しわたしに出来ないか。」  
 「上げるから、このしばを半分向こうの山までしよって  
 置いておくれ。」

たぬきは栗がほしいものだから、しかたなしにしばを背負って、先に立って歩き出しました。向こうの山まで行くと、たぬきはふり返って、  
 「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

にしばを刈っていました。そしてしばを刈りながら、袋へ入れて持って来たかち栗を出して、ばりばり食べました。するとたぬきはその音を聞きつけて、穴の中からのそのそはい出してきました。

「うさぎさん、うさぎさん。何をうまそうに食べているのだね。」  
 「栗の実さ。」

「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずんずん先に立って歩いていきました。やがてもう一つ向こうの山まで行くと、たぬきはふり返って、  
 「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」  
 「ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向こうの山まで



行っておくれ。こんどはきつと上げるから。」

しかたがないので、たぬきはまた先に立って、こんどは何でも早く向こうの山まで行きつこうと思っ、うしろもふり向かずにせつせと歩いていきました。うさぎはそのひまに、ふところから火打ち石を出して、「かちかち。」と火をきりました。たぬきはへん

はまたへんに思っ、

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼうというのは何だろう。」  
「向こうの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが言ううちに、もう火はずんずん背中に燃えひろがってしまいました。たぬきは、  
「あつい、あつい、助けてく

に思っ、

「うさぎさん、うさぎさん、かちかちというのは何だろう。」  
「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

と言っ、たぬきはまた歩き出しました。そのうちにうさぎのつけた火が、たぬきの背中のしばにうつって、ぼうぼう燃え出しました。たぬき

れ。」

とさけびながら、夢中でかけ出しますと、山風がうしろからどつと吹きつけて、よけい火が大きくなりました。たぬきはひいひい泣き声を上げて、苦しがつて、ころげまわって、やっとのことで燃えるしばをふり落として、穴の中にかけ込みました。うさぎはわざと大きな声で、

「やあ、たいへん。火事だ。」

「火事だ。」  
と言いながら帰っていきま  
した。

### 三

そのあくる日、うさぎはお  
みその中に唐がらしをすり込  
んでこうやくをこしらえて、  
それを持ってたぬきのところ  
へお見舞いにやって来まし

気の毒だから、わたしがやけ  
どにいちばん利くこうやくを  
こしらえて持って来たのだ  
よ。」

「そうかい。それはありがた  
いな。さっそくぬってもらお  
う。」

こういつてたぬきが火ぶく  
れになって、赤肌<sup>あかはだ</sup>にただれて  
いる背中<sup>せなか</sup>を出しますと、うさ  
ぎはその上に唐がらしみそを

た。たぬきは背中中大<sup>せなかじゅうおお</sup>やけど  
をして、うんうんうなりなが  
ら、まっくらな穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>にころ  
がっていました。

「たぬきさん、たぬきさん。  
ほんとうにきのうはひどい目  
にあったねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目  
にあったよ。この大<sup>おお</sup>やけどは  
どうしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまり  
ところかまわずこてこてぬり  
つけました。すると背中<sup>せなか</sup>はま  
た火がついたようにあつく  
なって、

「いたい、いたい。」

と言いながら、たぬきは穴<sup>あな</sup>  
の中をころげまわっていました  
た。うさぎはその様子<sup>ようす</sup>を見て  
にこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴ  
りするのははじめのうちだけ

だよ。じきになおるから、少すこしの間あいだがまんおし。」  
と言いって帰かえっていきまし  
た。

#### 四

それから四、五日にちたちまし  
た。ある日うさぎは、  
「たぬきのやつどうしたろ  
う。こんどはひとつ海うみに連つれ  
出だして、ひどい目にあわせて

だ。」  
「それなら山はよして、こん  
どは海うみへ行こうじゃないか、  
海うみはおさかながとれるよ。」  
「なるほど、海うみはおもしろそ  
うだね。」  
そこでうさぎとたぬきは連つ  
れだって海うみへ出でかけました。  
うさぎが木の舟ふねをこしらえま  
すと、たぬきはうらやまし  
がって、まねをして土の舟ふねを

やろう。」  
と独ひとり言ごとを言いっているところへ、ひよっこりたぬきがた  
ずねて来きました。

「おやおや、たぬきさん、も  
うやけどはなおったかい。」  
「ああ、お陰かげでたいぶよくな  
ったよ。」  
「それはいいな。じゃあまた  
どこかへ出でかけようか。」  
「いやもう、山はっこりごり

こしらえました。舟ふねができ上あ  
がると、うさぎは木の舟ふねに乗の  
りました。たぬきは土つちの舟ふねに  
乗のりました。べつべつに舟ふねを  
こいで沖おきへ出でますと、  
「いいお天てん気きだねえ。」  
「いいけしきだねえ。」  
とてんでんに言いいながら、  
めずらしそうに海うみをながめて  
いましたが、うさぎは、  
「ここらにはまだおさかなは

いないよ。もっと沖の方まで  
こいで行こう。さあ、どっち  
が早い競争しよう。」  
と言いました。たぬきは、  
「よし、よし、それはおもしろ  
かろう。」  
と言いました。  
そこで一、二、三とかけ声  
をして、こぎ出しました。う  
さぎはかんかん舟ばたをたた  
いて、

「やあ、たいへん。舟がこわ  
れてきた。」  
とたぬきがびっくりして、  
大さわぎをはじめました。  
「ああ、沈む、沈む、助けて  
くれ。」  
うさぎはたぬきのあわてる  
様子をおもしろそうにながめ  
ながら、  
「ざまを見る。おばあさんを  
だまして殺して、おじいさん

「どうだ、木の舟は軽くって  
速かろう。」  
と言いました。するとたぬ  
きも負けない気になって、舟  
ばたをこんこんたたいて、  
「なあに、土の舟は重くって  
丈夫だ。」  
と言いました。  
そのうちにだんだん水がし  
みて土の舟は崩れ出しまし  
た。

にはばあ汁を食わせたむくい  
だ。」  
と言いますと、たぬきはも  
うそんなことはしないから助  
けてくれと言って、うさぎを  
おがみしました。そのうちどん  
どん舟は崩れて、あっぷあっ  
ぷいうまもなく、たぬきはと  
うとう沈んでしまいました。

---

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社  
1983（昭和58）年5月10日第1刷発行  
1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

---

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

## かちかち山

楠山正雄 さく

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとお  
 ばあさんがありました。おじいさんがいつも畑はたけに出  
 て働はたらいていますと、裏うらの山から一ひとびきの古ふるだぬきが  
 出てきて、おじいさんがせたんかく丹精せいをしてこしら  
 えた畑はたけのものを荒あらした上に、どいんどん石いしころや土つち

くれをおじいさんのうしろ  
 から投なげつけました。  
 おじいさんがおこおって  
 追おっかけますと、すばやく  
 逃にげて行ってしまいました。  
 しばらくするとまたやって  
 来きて、あいかわらず  
 いたずらをしました。  
 おじいさんも困こまりきつって、  
 わなをかけておきますと、



ある日、たぬきはとうとうそのわなにかかりました。

おじいさんは躍り上がって喜びました。

「ああいい気味だ。とうとうつかまえてやった。」

こう言っつて、たぬきの四つ足をしばって、うちへかっついで帰りました。そして天井のはりにぶら下げて、おばあさんに、

「逃がさないように番をして、晩にわたしが帰るまでにたぬき汁をこしらえておいておくれ。」

と言いのこして、また畑へ出ていききました。

たぬきがしばらくぶら下げられている下で、お

ばあさんは白を出して、とんとん麦をついていました。そのうち、

「ああくたびれた。」

とおばあさんは言っつて、汗をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下がっていたたぬきが、上から声をかけました。

「もしもし、おばあさん、くたびれたら少しお手伝いをいたしましょう。その代わりこの縄をといて下さい。」

「どうしてどうして、お前なんぞに手伝ってもらえ

るものか。縄なわをといてやったら、手伝てつだうどころか、すぐ逃にげて行いってしまいうだろう。」

「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今いまさら逃にげるものですか。まあ、ためしに下おろしてごらんなさい。」

あんまりしつこく、殊勝しゆしょうらしくたのむものですから、おばあさんもうかうか、たぬきの言うことをほんとうにして、縄なわをといて下おろしてやりました。するとたぬきは、

「やれやれ。」

としばらくられた手足てあしをさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言いいながら、おばあさんのきねを取り上あげて、麦むぎをつくふりをして、いきなりおばあさんの脳天のうてんからきねを打うち下おろしますと、「きやっ。」という間まもなく、おばあさんは目をまわして、倒たおれて死しんでしまいました。

たぬきはさっそくおばあさんをお料理りょうりして、たぬき汁じるの代かわりにばばあ汁じるをこしらえて、自分じぶんはおばあさんに化ばけて、すました顔かおをして炉ろの前まえに座すわって、



おじいさんの帰りを待ちうけていました。

夕方になつて、なんにも知らないおじいさんは、

「晩はたぬき汁が食べられるな。」

「晩はたぬき汁が食べられるな。」  
 「おもひとりにこにこしながら、急いでうちへ帰って来ました。するとたぬきのおばあさんはさも待ちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいなさい。さつきからたぬき汁をこしらえて待ちましましたよ。」

と言いました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

と言いながら、すぐにお膳の前に座りました。そして、たぬきのおばあさんのお給仕で、

「これはおいしい、おいしい。」

と言つて、舌つづみをうって、ばばあ汁のおかわりをして、夢中になつて食べていました。それを見てたぬきのおばあさんは、思わず、「ふん。」と笑うひょうしにたぬきの正体を現しました。

「ばばあくつたじじい、

流しの下の骨を見ろ。」

とたぬきは言いながら、大きなしっぽを出して、

裏口うらぐちからついと逃にげていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰こしをぬかしてしまいました。そして流ながしの下のおばあさんの骨ほねをかかえて、おいおい泣ないていました。すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。と言いって、これも裏うらの山しろにいる白しろうさぎが入はいって来きました。」

「ああ、うさぎさんか。よく来きておくれた。まあ聞きいておくれ。ひどい目にあつたよ。」

とおじいさんは言いって、これこれこういうわけだとすつかり話はなしをしました。うさぎはたいそう気きの毒どくがって、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつととって上あげますから、安あん心しんしていらつしやい。」

とたのもしそうに言いいました。おじいさんはうれし涙なみだをこぼしながら、

「ああ、どうか頼たのみますよ。ほんとうにわたしはくやしくってたまらない。」

と言いました。

「大丈夫。あしたはさっそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合あわしてやります。しばらく待まっていらっしやい。」

とうさぎは言いって、帰かえっていきました。

## 二

さてたぬきはおじいさんのうちを逃にげ出だしてから、何なんだかこわいものですから、どこへも出でずに穴あなにばかり引ひっ込こんでいました。

するとある日、うさぎはかまを腰こしにさして、わざとたぬきのかくれている穴あなのそばへ行いって、かまを出だしてしきりにしばを刈かっていました。そしてしばを刈かりながら、袋ふくろへ入いれて持もって来きたかち栗ぐりを出だして、ばりばり食たべました。するとたぬきはその音おとを聞きつけて、穴あなの中なかからのそのそはい出だしてきました。

「うさぎさん、うさぎさん。何なにをうまそうに食たべているのだね。」  
「栗くりの実みさ。」

「少しわたしに出来ないか。」

「上げるから、このしばを半分向こうの山までしよっていっておくれ。」

たぬきは栗がほしいものですから、しかたなしにしばを背負って、先に立って歩き出しました。向この山まで行くと、たぬきはふり返って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずんずん先に

立って歩いていきました。やがてもう一つ向この

山まで行くと、たぬきはふり返って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

「ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向この山まで行っておくれ。こんどはきつと上げるから。」

しかたがないので、たぬきはまた先に立って、こんどは何でも早く向この山まで行きつこうと思つて、うしろもふり向かずにせつせと歩いていきました。うさぎはそのひまに、ふところから火打ち石を出して、「かちかち。」と火をきりました。たぬきは

へんに思おもって、

「うさぎさん、うさぎさん、かちかちいうのは何なんだ  
ろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

と言いって、たぬきはまた歩あるき出だしました。そのう  
ちにうさぎのつけた火が、たぬきの背せなか中のしばにう  
つつて、ぼうぼう燃もえ出だしました。たぬきはまたへ  
んに思おもって、

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼういうのは何なんだ

ろう。」

「向むこうの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが言いううちに、もう火はずんずん背せなか中に  
燃もえひろがってしまいました。たぬきは、

「あつい、あつい、助たすけてくれ。」

とさけびながら、夢むちゆう中でかけ出だしますと、山やま風かぜが  
うしろからどつと吹ふきつけて、よけい火が大きくな  
りました。たぬきはひいひい泣なき声こゑをあげて、苦くるし  
がって、ころげまわって、やっとのことで燃もえるし

ばをふり落<sup>お</sup>として、穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>にかけ込みました。うさぎはわざと大きな声<sup>こえ</sup>で、「やあ、たいへん。火事<sup>かじ</sup>だ。火事<sup>かじ</sup>だ。」と言<sup>い</sup>いながら帰<sup>かえ</sup>っていきました。

## 三

そのあくる日、うさぎはおみその中に唐<sup>とう</sup>がらしをすり込<sup>こ</sup>んでこうやくをこしらえて、それを持<sup>も</sup>ってたぬきのところへお見舞<sup>みま</sup>いにやって来<sup>き</sup>ました。たぬきは背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>大<sup>だい</sup>やけど<sup>やけど</sup>をして、うんうんうなりながら、

まっくらな穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>にころがっていました。

「たぬきさん、たぬきさん。ほんとうにきのうはひどい目<sup>め</sup>にあつたねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目<sup>め</sup>にあつたよ。この大<sup>おお</sup>やけどはどうしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまり気<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>だから、わたしがやけどにいちばん利<sup>き</sup>くこうやくをこしらえて持<sup>も</sup>つて来<sup>き</sup>たのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さっそくぬってもらおう。」

こういつてたぬきが火ぶくれになって、赤肌あかはだにただれている背中せなかを出だしますと、うさぎはその上に唐とうがらしみそをとろかまわずこてこてぬりつけました。すると背中せなかはまた火がついたようにあつくなくなつて、

「いたい、いたい。」

と言いいながら、たぬきは穴あなの中をころげまわっていました。うさぎはその様子ようすを見てにこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴりするのをはじめのう

ちだけだよ。じきになおるから、少すこしの間あいだがまんおし。」

と言いって帰かえっていきました。

#### 四

それから四、五日にちたちました。ある日うさぎは、  
「たぬきのやつどうしたろう。こんどはひとつ海うみに連つれ出だして、ひどい目にあわせてやろう。」  
と独ひとり言ごとを言いっているとところへ、ひよっこりたぬきがたずねて来きました。

「おやおや、たぬきさん、もうやけどはなおったかい。」

「ああ、お陰かげでたいぶよくなったよ。」

「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」

「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、こんどは海うみへ行こうじゃないか、海うみはおさかながとれるよ。」

「なるほど、海うみはおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬきは連れだって海うみへ出かけま

した。うさぎが木の舟ふねをこしらえますと、たぬきはうらやましがって、まねをして土の舟ふねをこしらえました。舟ふねができ上がると、うさぎは木の舟ふねに乗りました。たぬきは土の舟つちに乗りましました。べつべつに舟ふねをこいで沖おきへ出ますと、

「いいお天気てんきだねえ。」

「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いながら、めずらしそうに海うみをながめていました。うさぎは、

「ここらにはまだおさかなはいないよ。もっと沖おきの



方<sup>ほう</sup>までこいで行<sup>い</sup>こう。さあ、ど<sup>ど</sup>っちが早<sup>はや</sup>いか競<sup>き</sup>争<sup>そう</sup>しよう。」

と言<sup>い</sup>いました。たぬきは、

「よし、よし、それはおもしろ<sup>おもしろ</sup>かろう。」

と言<sup>い</sup>いました。

そこで一、二、三とかけ声<sup>こゑ</sup>をして、こぎ出<sup>だ</sup>しました。うさぎはかんかん舟<sup>ふな</sup>ばたをたたいて、

「どうだ、木の舟<sup>ふね</sup>は軽<sup>かる</sup>くって速<sup>はや</sup>かろう。」

と言<sup>い</sup>いました。するとたぬきも負<sup>ま</sup>けない気<sup>き</sup>になつて、舟<sup>ふな</sup>ばたをこんこんたたいて、

「なあに、土<sup>つち</sup>の舟<sup>ふね</sup>は重<sup>おも</sup>くって丈<sup>じょう</sup>夫<sup>ぶ</sup>だ。」  
と言<sup>い</sup>いました。

そのうちにだんだん水がしみて土<sup>つち</sup>の舟<sup>ふね</sup>は崩<sup>くず</sup>れ出<sup>だ</sup>しました。

「やあ、たいへん。舟<sup>ふね</sup>がこわれてきた。」

とたぬきがびっくりして、大<sup>おお</sup>さわぎをはじめまし  
た。

「ああ、沈<sup>しず</sup>む、沈<sup>しず</sup>む、助<sup>たす</sup>けてくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる様<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>をおもしろそうに  
ながめながら、

「ざまを見ろ。おばあさんをだまして殺して、おじ  
いさんにはばあ汁じるを食くわせたむくいだ。」  
と言いいますと、たぬきはもうそんなことはしない  
から助たすけてくれと言いって、うさぎをおがみました。  
そのうちどんどん舟ふねは崩くずれて、あっぱあっぱいうま  
もなく、たぬきはとうとう沈しずんでしまいました。

---

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社  
1983（昭和58）年5月10日第1刷発行  
1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

---

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。